

耕平さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-Kouhei.org



皆さん、こんにちは。八月も後半に入りましたが、まだまだ暑い日が続きます。くれぐれもご自愛ください。

かわら版では日常会話の中に含まれている仏教用語を紹介しています。知らず知らずのうちに使っている仏教用語。それだけ日本人の生活に溶け込んでいるということですね。

さて、先月は「馬鹿」についてお伝えしました。サンスクリット語の「モーハ」という言葉が、お釈迦様の弟子パングカの覚りの逸話から漢字で「茗荷(バカ)」に転じたところまでお伝えしました。お忘れの方は先月号を是非もう一度お読みください。

さて、「パングカ」が転じて「茗荷」になりましたが、まだ「馬鹿」にはなっていない。「馬鹿」になるにはもうひとつの中国の逸話が影響しています。それは秦の悪臣「趙高」にまつわる話です。

野望を抱き始めました。皇帝寄りの家臣もいます。そこで趙高は、どの家臣が自分の側につくかを把握しておく必要があると考え、一計を案じました。

趙高は宮中に鹿を連れてきて「珍しい馬です」と言って皇帝に献上しました。皇帝は「鹿だろう」と尋ねたところ、家臣の中には皇帝の言葉を肯定して「鹿です」と言う者と、趙高を恐れて「馬です」と答える者に別れました。

皇帝の「鹿」に同意するか、趙高の「馬」に同意するかで踏み絵を踏ませたという逸話です。趙高は「鹿」と答えた家臣を敵とみなし、粛清しました。

「馬鹿」とはなんと虚しい言葉でしょうか。肯定的なパングカの「茗荷」の逸話とは逆で、「欲」にまみれ、権力に阿(おもね)る者を「馬鹿」と評しました。

もうひとつ別の逸話もあります。禅語の「担板漢(たんぱんかん)」に由来します。「担板漢」は「板を担ぐ漢(おとこ)」。 「担板」は幅が広く、右肩に担ぐと左側は見えますが、右側は板が邪魔で見えません。

左肩に担ぐと今度は左側が見えなくなり、右側は見えなくなります。こんな人が雑踏を歩いていたら周囲の人はさぞ迷惑。「ちゃんと周りを見なさい、バカ者」と叱られます。

「担板漢」とはつまり、物事を一面からしか見ていないにもかかわらず、その一面だけで全てを見たかのように知ったかぶり、真実や全体像に目を向けない愚かさを象徴する言葉です。未熟な修行僧は「一面に捉われるな」という意味で師匠から「担板漢」と言われて叱られるそうです。要するに「バカ者」という意味です。

この「たんぱんかん」の音が短縮されて「バカ」に転化し、「悪臣趙高」の逸話とも結びついて「馬鹿」という漢字になっていきました。

パングカのような純粋さを象徴する「茗荷」、趙高のような欲に溺れる愚かさを象徴する「馬鹿」、偏らない物の見方を諭す「担板漢」。どういう経過で「モーハ」の漢訳「慕何」「莫迦」が「馬鹿」になったのかは、今も諸説あって論争の的です。面白いですね。それではまた来月。ごきげんよう。



豊田 中日文化センター (6回シリーズ 4~9月) 暮らしの中の仏教



今を生きる現代人にも影響を与え続けるお釈迦様の教え。仏教は、なぜ誕生し、いつ、どのように日本に伝わり、何を教えているのでしょうか。講座を通して、日本の社会や日時生活の中に浸透した仏教に親しみます。毎回、仏教の歴史、仏教の教えとともに、日常会話の中に浸透した仏教用語などを、わかりやすくお伝えします。4月から6カ月講座です。

講師 早稲田大学客員教授 大塚耕平

詳しくは下記フリーダイヤルまでお問合せください。

豊田 中日文化センター ☎0120-98-2841

